［水田作部門］ 農業研究所ホームページへ

3．飼料用米専用品種「モミロマン」の収量性と早植えによる増収効果

［要約］
「モミロマン」は、施肥窒素量４～12kg/10aの範囲において、「アケボノ」に比べて粗玄米収量が約２割多い。また、「モミロマン」は「アケボノ」と異なり、早植えによる増収効果が大きい。

［担当］ 岡山県農林水産総合センター農業研究所　作物・経営研究室
［連絡先］電話086-955-0275

［分類］ 情報

［背景・ねらい］

多収性品種は一般に多肥栽培が必要とされるが、コストや散布労力の点で施肥量を抑えたい場合も考えられる。そこで、少肥～多肥栽培条件の下で、飼料用米専用の多収性品種「モミロマン」の収量性を、県内の飼料用米生産で主に用いられている「アケボノ」と比較し、多肥栽培以外の増収方法を明らかにする。

［成果の内容・特徴］

１．「モミロマン」の粗玄米収量は、施肥窒素量４～12kg/10aの条件において、いずれの施肥量においても「アケボノ」比116～119％と多収である（図１）。
２．「アケボノ」は、６月上旬～下旬の範囲で移植時期による収量差がほとんどないのに対し、「モミロマン」は同一作期の「アケボノ」比でみると、６月下旬移植で101％、６月中旬移植で111％、６月上旬移植で120％と顕著に増収する（表１）。
３．これは、「モミロマン」の一穂籾数が「アケボノ」と比べて約２倍と著しく多いために㎡籾数を確保しやすく、移植時期を早めることで登熟歩合が高まることが、増収につながるためである（表１、図２）。

［成果の活用面・留意点］

１．農業研究所（赤磐市）における、土壌可給態窒素量が100ｇ当たり10.6mgの圃場において行った、栽植密度15.9株/㎡の稚苗移植試験での結果である。
２．「モミロマン」を導入する際は、食用米への混種が起こらないよう、充分注意する。

［具体的データ］

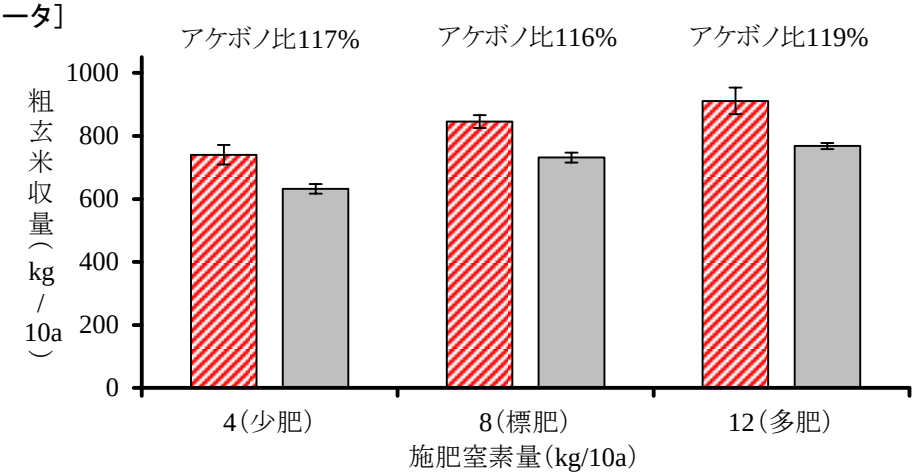

図1　アケボノと比較した、モミロマンの収量性

注）2014年（6月上旬移植）と2015年（6月中旬移植）の平均値

施肥窒素量の配分（基肥-穂肥）は、少肥：0-4、標肥：4-4、多肥：4-8

モミロマン　アケボノ　　図中の縦棒線は標準誤差を示す

表1　移植時期が登熟、収量に及ぼす影響

品種	移植期（月/日）	試験年次	出穂期（月/日）	成熟期（月/日）	穂数（/㎡）	一穂籾数	㎡籾数（×100）	登熟歩合（%）	千粒重[z]（g）	粗玄米収量[y]（kg/10a）	
モミロマン	6/6	2014	8/21	10/23	246	185	456	65	25.3	889	(120)
	6/16	2015	8/31	11/7	227	206	468	46	25.3	803	(111)
	6/26	2013	9/3	11/5	252	193	485	40	25.0	756	(101)
アケボノ	6/6	2014	8/29	10/17	369	83	307	97	26.7	741	-
	6/16	2015	9/6	11/3	299	95	283	92	26.1	722	-
	6/26	2013	9/7	10/26	348	100	347	74	25.1	747	-

注）施肥窒素量8kg/10aで栽培

[z] 精玄米（粒厚1.8mm以上）について調査

[y] （ ）内の数字は同一作期のアケボノの値を100とした相対値

図2　穂の外観の違い

［その他］

研究課題名：大規模経営に対応した効率的稲作システムの確立

予算区分：県単

研究期間：2013～2015年度

研究担当者：渡邊丈洋